

ここで言つておきたいのは、その頃世間の一部には妙な風潮があつたことである。それは、原子核物理学の発展につれ、その頃初め

にプロットをあげばいた後の頭述べれば、次のようになる——先ずその反應は極めて微妙だと振れ出しておいて、なか／＼實驗

となつていたのである。その晩の八時頃だつたと思う。私は用事をそこ／＼に片付け地階へ行つて見ると、先ず何となく、

とて聞いた話だが、附添の一人は元警視廳巡查で、包圍の連中とは以前からの顔見知りだつたので、遂に室内の立會の方へは加え得な

かつたとか。

十時頃だつたと思う、次官が歸つて来て、今に陣中見舞がくるよ」と言つたので、私はほつとして助かつたような氣がした。そのうちにヌシだのソバだのが届けられた。だが、實驗の方はいつ始まるのか、見當もつかないから、とにかく、御馳走にだけなつて、私人は先に御免を蒙ることにした。

えられているのを發見したから大に自信を得、若い連中を激勵し、居眠つたふりをよそわせて、難なく現場を取押えたのだ」という。話はそれだけで、その後本人が、どういふ處分を受けたかは聞き漏らしてしまつた。

は、アメリカで「忘れるな眞珠灣を」と言われるトレッチェリイの張本人だとされているし、また二三年後任であつた大西瀧治郎は、人の子を操彈の代用品に使つた、ヒュマニテイの敵だと言われている。

長崎にて

佐藤 佐太郎

こんなことが幾晩つづいたかは忘れてしまつたが、私の立會わなかつた或る晩、彼は容器摺り換えの現場を押えられ、警視廳へつれてゆかれたと聞いた。あとで大西君の話によると「實驗の都合上、途中で操作をやめる場合には、その都度、凡ての容器に嚴重な封印蠟をさせて、これを航本の金庫にしまふことにした。ところが、彼等の持込んだ容器なるものが、粗末な薬瓶だつたから、ひそかに金庫をあげさせ、凡ての瓶の側壁にある氣泡を丹念にスケッチさせて置いた。然るに或る日のこと、その一つが前になかつたものと、取換

新しくととのふ土に日は照れり廿七聖人殉教の丘
浦上の御堂の址に無元罪サンタマリアの鐘のこりけり
四年まへ滅びたるあと整へて御堂の石を石垣にせり
皓臺寺墓地にのほりて街中に白き坂道のみゆる寂しざ
久しかる願ひとおもふ樟の木の若葉あかるき長崎ここは
しづかなる心となりて通りたり東山手の石疊みち
天主堂修理のかすかなる塵うごきザビエル立像も心しづけし

今や敗戦の結果、海軍というものはなくなつた。私もまた職業軍人の片われとして、追放の身となり、この片田舎の郷里で義虫のような餘生を送つているが、私より二、三年先任であつた山本五十六

だがもし、この兩人が生き残つていたとしたらどうか。「文明」を原告とする裁判では、恐らく極刑に處せられたらうと判断する私の理性と、他方、個人としての兩人が、共に茶目で、闊達で、親切で

海中測候所

宇田 道隆

あつたことをなつかしむ私の感情とが、古ぼけた頭のなかで、矛盾し對立している。
また實驗に立會つた若い參謀連も、果してその幾人が生存しているかを、今では知る由もないが、ほんのしばらくの時間だつたが、この實驗を見にこられた高松の宮様と、後に商工相、外相、軍需相を歴任した豊田貞次郎氏と、それに私を加えた、唯この三人だけが、死なずにいるような氣がする。
(元慶大工學部長)

長年北は樺太、北海道、千島から南は臺灣、琉球、小笠原まで沿岸の漁業者に會つて色々海の珍しい話を聞き集めて來たが中でも海中、海底の話には想像も及ばなかつた不思議な話が多い。潜水の大家の三浦定之助さんが隨筆でたくさん紹介されているが、まことに

説いても盡きない不思議を藏した未知未見の世界が海中にある。私は最近天草島と五島の方で裸潜り二十年、三十年とやつて来たその道の名人と言われる人から聞いたことを少し筆に上して見たい。

海中の怪物談は数多く聞いて来たがまだどうも余り標本として採集されたことのない得體の知れぬ生物がいるらしい。初夏のころ沿岸に差しこむ暖流に乗つて来る一丈、二丈も糸をひいた長クラゲが觸れては人の皮膚を切るような害をする話もきいたが、「息とめかせ」といつて茶わんだのウニで、蓋のような觸手を出している、それが人間の皮膚についたら毛穴から毒が廻るものと見えて、忽ち喉が腫れあがつて呼吸ができぬ上に顔も目が見えぬぐらい腫れあがるという話には驚いた。この話をしてくれた潜水夫のMさんは鮑とりに夢中になつていて乳の下を刺され、直ぐ強くこすりつたにもかかわらず、すんでのこと一命を落とす程に患つたというこゝろであ

る。戦時中軍で着目して船一杯採集させられ、鶏で動物試験して三分間で即死するのを見せられたそうだがこんな毒ウニが海底にたくさんいて、波に揺られてコロコロしているなどと聞くと龍宮も案外おそろしい所である。

『例のなめしてハンド・バッグなどになつているウツボは黄ダコといつてはいるが、その穴へ手をつっこむとかみつかれる。海底で大石も陸上とちがつて割合軽がるも持てるが、その石の蔭によく長さ一丈もある「海ムカデ」がいてビツクリする。又「海蛇」といつて、胴から上は蛇體で下半身はウツボか魚の尻の形をしたものもある。アラは十二、三貫という巨大なのを獲つたことがある。大蛸は五貫大のをとつた。殊に恐いのは「ホシダコ」という化けもので、一見小さいと思つているとニユーツと一丈以上も腕を延ばし、見た目の四、五倍も大きくなつて、鉗を抱きこむ。體重三〇―五〇貫という大鱈でも海底では友達で、鉗、鐵砲を

持つているので近づかぬ。身構えると逃げる。白禰を紐解いて垂らすと逃げる。フカに襲われたら身體を水平にして泳ぎ、フカよりも上へ位置するようにすれば喰われぬ。水中では横は十米ぐらいいか見通しが利かぬから、不意にフカが現れれば鉗先へくいつき突いた魚を横からつかつて逃げて行く。この味を占められると後々寄つて来て魚を突かせぬ。二、三十米の海底で五貫も七貫もあるアラと水中で戦争し魚は上げられまいとする、人間は上がろうとする。息三分間という呼吸が迫つて来るのに突いた魚が惜しくて逃がし切れぬときにとうとう絶息して沈んだ仲間の潜水夫を引きあげることがよくある。』

私が最も興味を持つのは海底で天候の變りが早くからわかり、大風が一日乃至三日も前から豫知されるという話である。『台風の前には海底の岩の下から白いゴミのような濁りが煙のよう

に出て来る。底に海水の振動が現れ、「底ウネリ」といつて、底揺れがして来る。潜水して魚をとろうと思つて石の下を見ておると、ウネリがグツと腰の方を持つて行く。水面へ上がつて上にも波があるかと思つて見ると上には波が見られず、靜かで、半日も一日もおくれてウネリが海面に出る。底ウネリはシケの二、三日前から來つて、風は虚ごと波は眞こと」といふ言葉通り、底ウネリを見ておると大風がどちらから來るか豫知される。底ウネリの力は人間の想像以上である。家ぐらいの大石がギーツ／＼ときしり出す。

底揺れがしたすと海中でバリバリ、カチカチと石がぶつかる音が聞え出す。十數貫の底石が飛んで來るほどになる。大風の後では飛んでもない所に大石が轉つて來ていて、ニユーツと突き出たり、昨日まであつた大岩が無くなつたり、底が掘れたり、平らな海底がメリこんだり、岩に洞穴があいたり、色々海底地形の異變が起る。

底揺れと共にソオの流れも速く

にはエイが飛び出して來るのも確

資料になる。私はこのよりの海

昭和七年七月

てくれた潜水夫のMさんは鮑とり
に夢中になつていて乳の下を刺さ
れ、直ぐ強くこすりつたとたにか
かわらず、すんでのこと一命を落
とす程に患つたということであ

さいと思つているとニューツと一
丈以上も腕を延ばし、見た目の四、
五倍も大きくなつて、銆を抱きこ
む。體重三〇―五〇貫という大鱈
でも海底では友達で、銆、鐵砲を

天候の變りが早くからわかり、大
風が一日乃至三日も前から豫知さ
れるという話である。
『台風の前には海底の岩の下から
白いゴミのような濁りが煙のよう

いて、ニューツと突き出たり、昨
日まであつた大岩が無くなつた
り、底が掘れたり、平らな海底が
メリこんだり、岩に洞穴があいた
り、色々海底地形の異變が起る。

底揺れと共にシオの流れも速く
なり、シオが狂つて異常な潮流が
行かず、シケ潮という一方向きの
片シオが行く。水温の變化も起
り、急に冷たくなつたり、暖くな
つたり、上下の分布が逆轉したり
暖冷が斑らにでたりする。急に水
が冷たくなつて、齒がうづいて下
にはいつておれないようなときは
天氣の變るシケの前兆だ。

にはエイが飛び出して来るのも確
かな前兆である。一體に天氣が悪
くなつて来ると、魚が勇む。風で
は石を投げ入れるとすぐ穴の中へ
逃げる魚が一向逃げもせず、よ
く腹が減らぬものと思ふくらい
泳ぎ廻るときは大風が来る。シ

資料になる。私はこのような海象
要素を自記する器械を設備した海
中測候所を夢みている。自記流速
計、自記波脈計もでき上つたし、
自記水温計、自記検潮儀はある。
海中で海水の清濁を観測し、照る
日、曇る日を調べ、暴風雨の豫報の

急に海外留學のため出發せよと
云ひつかつた時には私はまだ大學
の助手であつた。俄か仕立ての助
教授となつて、まだ丸刈り頭でネ
クタイを結ぶのを稽古しながら、
神戸から英國行きの船に乗りこ
んだ。憧れぬいた歐洲の學問に親
しく接することができるといふ喜
びと甘い未來の幻想とに若い胸は
躍り勇んでゐた。美しい鳥の囀る
紺碧の森と名も知らぬ草花に色ど
られたグリーンとを縫つて古雅な
コレツチとチャペルとが永い歴史
を湛えてそ、り立つケムブリツチ
に着いたのは、所謂メーウキョーク
で、學生の家族が賑かに集つて來
てゐて、ポートルースがあり、一年
に一度のダンスパーティーが催さ
れてゐた。それをよそ目に私は天

大風はアワビが一番よく知つて
いる。波立つとアワビはコロコロ
轉るが、不思議に大風前にはアワ
ビは隠れてしまつていつもの場所
におらない。大風の吹く年には波
の來ぬところによんで隠れる。
南の大風吹くときは南を受けた上
ミ手の北の方の波のかげにかくれ
て塊つている。北におれば南から
の大風、南におれば北からの大風
と推定して外れがない。アワビは
口開けていて揺れて口もとなび
いて來る海藻をくう。イセエビは
波受けの穴を換えて、南から波の
來る時は豫め北向きの穴に移轉
し、南向きの穴ををらぬ。シケ前

ケ前の小魚は瀬でもまれるのでつ
いておれず塊つて泳いでおる。
このように、ウネリ、狂い潮は
沿岸ではアビキ(副振動)を三示し、
水温變化と共に有力な天氣豫報の

材料が得られ、海中生物の動靜、
海藻の榮枯消長から海底の變化ま
で知ることができよう。
一步進んで毒ウニ、毒クラゲな
どから靈藥をつくる時代も來て新
海底資源が開發される日が來るだ

新居 豊中市櫻塚より池田市中之島に移る
病褥に坐れば稊麥をあををと
美しき五月はじまる青麥に
青麥の穂が見て妻子らと夕ころ
養痾三歳を超え遂に〇社を退く。二十五年在社せし、
病牀に四肢を横たへ離職せり
春の蚊を孤閨の妻が打ちし音

新居

日野草城

ケムブリツチの 思ひ出

萩原雄祐

(長崎海洋氣象學長・理博)